位打专東地区土地区画整理事業にともなう

理蔵交化銀瓷温調查凞票銀告書

1980

吹 田 市 教 育 委 員 会 吹田市都市開発部区画整理課 吹田市佐井寺は、かって千里丘陵の緑に囲まれた清閑な村で、その中心には僧行基の草創といわれる佐井寺や、延喜式内社伊射奈岐神社があり、古い歴史をもつ集落として知られてきました。しかし戦後千里ニュータウンの造成にはじまる開発工事の中で、周囲の情況が急速に変貌してゆき、市民の生活環境を守るために計画的開発が必至となってきました。

さいわい地元住民各位の協力を得て、都市開発部によって土地区画整理事業に着手すること ができるようになりました。

しかし、この土地区画整理事業地域内には、2箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地があり、その他にも、かって農民の生活を支えたたくさんの農業用用水池があります。市教育委員会では、このたび計画段階で把握した埋蔵文化財の発掘調査その他の調査を実施いたしました。

本書はその成果をとりまとめたものでありますが、これによって佐井寺地区の歴史に新しい 資料を加えることができました。

本書の完成を機に、調査のためにご協力をいただきました各位に感謝するとともに、今後、 この周辺において行われる開発行為に際しても、文化財保護の面から市民の皆様のご協力をお 願いいたします。

昭和55年3月31日

吹田市教育委員会

教育長 中村勇一

例 言

- 1. 本書は吹田市土地区画整理事業として実施される佐井寺東地区土地区画整理事業地域内に所在する埋蔵文化財(吹田34号須恵器窯跡および佐井寺くりぬき水路他)発掘調査の概要報告書である。
- 2. 現地における発掘調査は、昭和54年12月17日から昭和55年3月31日まで実施された。
- 3. 現地調査及び本書の作成は吹田市教育委員会が行った。調査費は区画整理事業費による。
- 4. 本報告書の執筆は主として、吹田市教育委員会 藤原 学、府文化財愛護推進委員 鍋島敏也 が分担してあたり、一部については増田真木の援助を得た。
- 5. 資料整理については、関西大学考古学研究室学生増田真木、西岡幸治、西岡誠司の協力を得た。
- 6. 現地調査・内業調査参加者は別記するが、調査の遂行にあたっては、大阪府文化財愛護推進委員各位から、貴重な助言や教示を頂いたことを銘記する。

目 次

第1章	発掘調査に至るまで····································
	位置と環境・・・・・・・・・・・2
第3章	調査の経過
第4章	34号須恵器窯跡の調査
第5章	くりぬき水路の調査
第6章	その他の調査
第7章	総 括

			一調	查	組	織	_			
調査主体	吹 田	市教育委員会				調査補助員	白神	典之(関西	大学考古学研究	室学生)
調査主任	藤原	学				"	上田	睦(")
調査員	鍋島	敏也(大阪府文化財愛護推)	進委員)			"	西岡	誠司(" ")
"	米田	文孝(関西大学考古学研究	室大学院	注生)		"	斎藤	隆弘(")
調査補助員	増田	真木(関西大学考古学研究	室学生)			"	立石	堅志(,)
"	西岡	幸治(/ / / / / / / / / / / / / / / / / / /)			"	合田	茂伸(")
"	西本	安秀(/)			調査協力	奥	保藆(大阪)	守文化財愛護推議	進委員)

第1章 発掘調査に至るまで

吹田市は大阪市に北接し、大阪市の衛星都市として、人口32万人余を擁する中規模都市である。歴史的には古代以来目立った政治的特質はなく、特に近世以降は大阪の近郊農村地帯のひとつとして位置づけられていた。近代以降は大阪市のベットタウンとしての性格を顕著にし、大正年間には千里山住宅地の開発がはじまっている。太平洋戦争後は、その性格を一層顕著にし、昭和36年には千里丘陵に東洋一を誇称する一大計画都市である「千里ニュータウン」が造成されはじめ、昭和39年には入居が開始された。

一方千里丘陵の周縁部や沖積平野での宅地化 も活発に行われたために無計画な宅地造成の 波は、住環境の悪化のみならず、全国的にも著 名な須恵器窯跡群をはじめ、弥生時代以降の数 々の遺跡を消滅させるにいたった。

このような乱開発から、市民の快適な生活環境を守るため、計画的な都市開発が必要となった。吹田市当局は、昭和40年から市域南部において土地区画整理事業に着手し、南吹田第1・南吹田第2地区土地区画整理事業を実施してきた。しかし、これらの事業は当該地域に存在する埋蔵文化財・民俗文化財・自然植生等にまで保存の配意をすることなく推進された。

このような文化(財)に対する関心が、地方 公共団体や市民にあっても、今日ほど注目され ていなかった当時においては、その施策は充分 でなかったのである。

この結果、昭和41年の秋に実施された南吹田 第2土地区画整理事業では、古墳時代~平安時 代~中世期にわたる、広大な複合遺跡が道路工 事と下水道工事によって発見されたものの、無 調査のまま分断したので、遺跡の範囲すら把握 することができないまま完了した。

土地区画整理事業の完了をもって開始された 市街化諸工事では、垂水町三丁目地帯の至ると ころで遺構・遺物が発見され、昭和51年以来開 始された国庫補助事業による吹田市教育委員会 の遺跡発掘調査事業と、原因者負担による緊急 調査が多数実施されたが、いまなお急進する都 市化と遺跡保存が相克し、有効な手段もないま ま、事前の緊急調査がわずかに先行している傷 ましい状態である。

このような苦い経験をふまえて、佐井寺東地区土地区画整理事業においては、初めて事業の計画段階において、文化財保護に対する協議が、昭和49年以来市教育委員会と区画整理課の間で進められることとなった。

昭和51年5月8日、市教育委員会より、土地区画整理課に対して、「佐井寺東地区土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財保存に関する資料(I)」が提出された。これによって市教育委員会は、土地区画整理事業地内には、3カ所の周知の遺跡があり、うち34号須恵器窯跡(古墳時代)と佐井寺くりぬき水路(江戸時代)は、ともに遺構が現存しており、土地区画整理事業にともなう造成工事で、相当の影響をまぬがれないことを明らかにした。これにもとづき両者の協議がつづけられ、早急に試掘調査を実施し、遺構の包蔵状況を把握する必要があるとの合意に達した。

一方では、佐井寺の地元有志・吹田郷土史研 究会などから区域内における文化財に強い関心 がよせられるに至った。

昭和49年8月には、佐井寺くりぬき水路の入口側にあたる沈砂池から取水口において、建設部土木課の手によって改修工事が実施されることとなり、同時に行われた応急調査によってくりぬき水路取水口付近は、花崗岩の切石を組合せた、強固な構造のものであることが判明し略実測と写真撮影による記録ができた。

このような経過を経て、佐井寺くりぬき水路 は、現在市内に遺存する唯一のくりぬき形農業 用水路であり、これの保存に対する市民の注目 と要望が一段と強いものとなった。

ついで昭和50年9月13日吹田郷土史研究会か

ら、佐井寺くりぬき水路保存要望書が提出せられ、昭和51年10月22日、この要望をめぐって、 現地において、吹田郷土史研究会・吹田市教育 委員会・吹田市開発部区画整理課三者立会によ る協議が行われた。

この時、区画整理課より、くりぬき水路出口付近は公園化によって保存すると説明されたが、その時点では、くりぬき水路の旧出口が確認されておらず、地方有志も地形変貌のいちじるしい今日、旧出口を的確に指摘することは困難であるとせられ、旧出口の位置未確認のまま保存計画の策定はできないとの結論に達した。

これらの経過をふまえて、とにかく発掘調査による位置確認を急ぐこととなり、昭和53年度においては、とりあえず34号須恵器窯跡と佐井

寺くりぬき水路の2カ所に対して、予備調査を 行うこととなった。昭和54年1月12日から1月 22日に行われた予備調査(第3章で詳述する) の結果、次年度に本格調査を実施することが必 要であると決定された。

昭和54年7月31日吹田市教育委員会から、吹田市都市開発部に対して、本格調査の実施計画書が提出され、開発部において予算措置が構ぜられ、昭和54年10月を期して発掘調査を実施する計画ができた。しかるに昭和54年夏から秋に至る間に、市内における重要な埋蔵文化財調査が続出したため、本調査への着手が12月まで延期され、12月17日に至って34号窯跡の調査が開始された。

第2章 位置と環境

吹田34号須恵器窯跡は、吹田市佐井寺3559番地を中心とする。旧佐井寺集落の東北方に、南方から半島状に突出する標高46m・比高18mの洪積層の丘陵上にあり、西方に千里ニュータウンを隔てて石堂ヶ岡を中心とする丹波山地の前線をのぞみ、北方に万博公園を隔てて、阿武山を中心とする北摂の山々をのぞみ、東方には大淀の流れを隔てて、生駒・信貴の山々をのぞむ。

南西方の眼前には、かつて純農村であった200余戸の農家を中心としたが、今や周囲に膨張して戸数400戸を数える佐井寺の集落をのぞむ。この佐井寺の集落は、千里丘陵を開析して生成された、山田川・正雀川・糸田川・高川水系のうちの、正雀川の支谷の最奥にできた集落で、行基僧正開基の伝承をもつ佐井寺、延喜年間名神大社に列せられた伊射奈岐神社(佐井寺村誌)を中心として発展してきた。農耕を生業とし、牛ヶ首・南谷・尻谷・太田・新池・北谷・西児・河田等の溜池をはじめとする多数におよぶ大小溜池による用水によって経営された。

佐井寺村誌によれば、村南に地蔵塚と呼ぶ古

跡ありとするが、この名は行基僧正佐井寺草創の時、この山に来り感得して地蔵尊を得たるによって命名したとある。巷間古墳と伝えることには誤りがあるようである。

古くは山田佐井が原と称したが、のち島下郡 佐井寺村を称し、明治22年三島郡千里村に合 併され、吹田市と千里村の合併によって、吹田 市佐井寺となった。

34号窯跡は、名神高速道路の吹田サービスエリヤの西北方700m、府道岸部〜東佐井寺線東方50mにあたる。この付近は全面竹林に覆われ、以前は最高部の平担地に果樹園があったが、竹林に押されて全く廃絶してしまった。

佐井寺くりぬき水路は、佐井寺集落の余水を 釈迦ヶ池に導入するために掘られた箱根用水形 の水路で、取水口を佐井寺町1丁目25番地、出 口を佐井寺3662・3664・3654番地に有する。吹 田市原町4丁目所在の竜ヶ池東岸を経て、佐井 寺集落に通ずる道路の峠から釈迦ヶ池に派出す る丘陵の最狭部の丘陵下をくりぬいて構築した ものである。 現在このくりぬき水路と直交して丘陵上に府 道岸部東佐井寺線が走り、6軒の民家が丘陵の 斜面に建てられている。しかしこれらの民家は、 すべて大平洋戦争終結後に建てられたもので、 以前は該水路の上に人家を建築することは、佐 井寺集落の人々にとってもひとつのタヴーであ ったらしい。それほど人々は農業用水を清浄に 保持する信仰にもちかい習慣があり、今日のように下水を農業水路や、溜池に放流してはばからない思想は、太平洋戦争終結後のものであり、くりぬき水路の出口付近は犬の死骸をはじめ、付近住民のゴミ拾て場となり、悪臭鼻をつく場となりおおせている。



第1図 須恵器窯跡等分布図

第3章 調査の経過

(1) 第1次調査の概要

第1次調査は、昭和53年12月13日から昭和54年1月22日まで、両遺跡とも、坪掘りと、トレンチ設定による限定試掘調査として実施された。

34号須恵器窯跡

34号須恵器窯跡については、地形実測のほか、 窯体・灰原の遺存部に対して合計3ヵ所のトレンチを設定した(I~Ⅲトレンチ)ほか、第Ⅱ トレンチの上部にある竹薮内の崖面を精査して、 窯体の断面を検出し、実測を行った。第Ⅰトレンチは、灰原の末端にちかい、竹薮内のやや 平坦になった部分に設定して、灰原の広がりと、 灰層の堆積状況を把握することを目的とし、全域から灰層の存在を確認した。

第Ⅱトレンチは、崖面で窯体の断面を検出し た下部の、やや平坦な部分に設定して、窯体前 方の、所謂前庭部と推定される個所、すなわち 窯体最前部と灰原の接点を把握することを目的 としたが、二次的に堆積した赤色焼土層を確認 したにとどまった。

第Ⅲトレンチは、現地形の最高部に設定し窯体最上端の遺存状況を把握することを目的とした。ここでは地山粘土層の急激な落込みと、赤色焼土・須恵器破片を検出し、窯体が現在の丘陵最高部にまでおよんでいることを確認した。

くりぬき水路

佐井寺くりぬき水路については、雑草刈取ののち、写真撮影・地形測量により現状を記録し現在のくりぬき水路出口から内部の状況を観察した。現状は出口を切石積にて囲み、水路内部には直径1mのヒューム管を伏設している。そ



第2図 34 号 窯 跡 景 観

の長さは観察可能な限りにおいて20m弱と推定 した。

このヒューム管内には約50cmの泥土が全面に わたって堆積し、出口からの潜入調査を不可能 にしていた。したがって潜入調査を中止し地表 面よりの掘削による調査を開始した。

掘削調査の開始にあたっては、佐井寺在住の 奥保蕃・奥与右衛門両氏の助言を得て、かって 陥没した数度の経験談を基礎として、推定地帯 をボーリングして、二ヵ所の地盤軟弱個所を発 見し、山裾と出口の中間にちかい一ヵ所に試掘 塘を設定した。

試掘壙は3m×5mの広さとして階段状に掘進したが、掘進の進行につれて砂質粘土層からの湧水が激しさを加え、壙壁の崩壊がつづき、掘進の続行が不可能となった。ここで、約1mの板枠を挿入して中心部のみの掘進に切りかえ地表下約2mの部分において、竹組の遺構を検出した。竹組の下層における堆積土は特に軟弱な含水率の高い泥土で、竹組以下の検出も不可能となったので、湧水の排除に並行して竹組の略測と写真撮影を実施した。

竹組および、伴出磁器片を検討した結果、この遺構は、水路創設時のものではなく、近代における陥没箇所の補修遺構であるとの推定をもって結論とした。

以上の所見により、くりぬき水路の旧状は依然不明であり、すくなくとも現在の水路出口は戦後付近において造成工事が行なわれた際の構築であり、約20mにわたるヒューム管の伏設も、これと時期を同じくするものであることが判明した。したがって水路の旧出口は、現出口の約20mよりもなお西方の山裾の等高線変換点下であることが推定され、平地部分における水路はよく保存されていることと判断した。残る課題は、新旧水路の接点を求明することとなった。

(2) 第2次調査の経過

第2次調査は、昭和54年12月17日から開始された。

34号須恵器窯跡

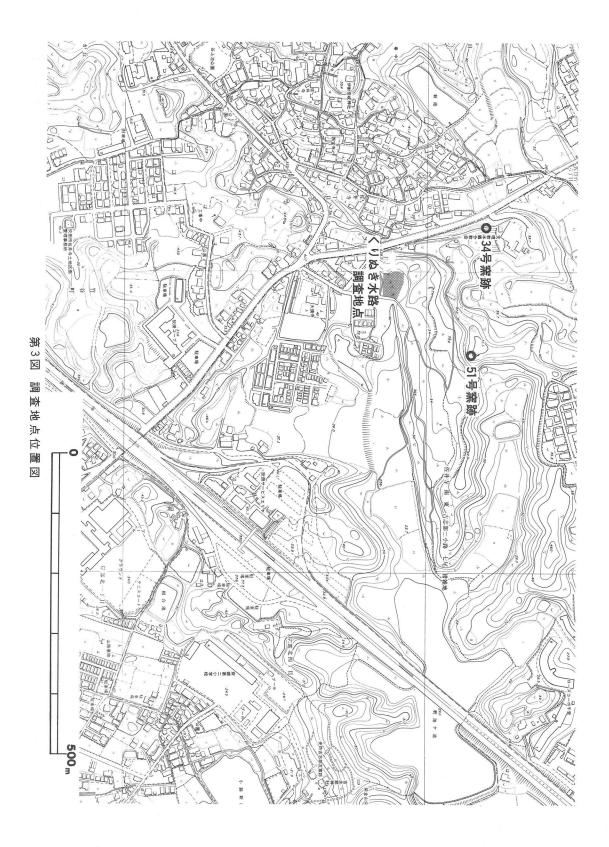
34号窯跡は第1次調査によって発見された窯体の断面を中心として、1200㎡の竹薮と雑草を 筏採し、現在の地形を50㎝等高線によって地形 実測をした。

まず、窯体の遺存している丘陵最上部の発掘を入力により12月21日より開始した。灰原部分の調査については、灰層の流失と、後世の堆積土量を考慮した結果、現地形が急斜面であり、加うるに調査区の西端に隣接している府道岸部一東佐井寺線は、路線バスも運行される交通量の多い道路でもあり、危険防止の重要性から、工法上の検討のため一時調査を中止したが、諸般の準備が整った2月8日から重機械を導入して調査を再開した。

調査の進行により、窯体はほぼ同一主軸線上に、2基が縦続して構築されていることが判明し、上部に構築されたものを「34-A窯」・下部に構築されたものを「34-B窯」と呼称することとした。

特に34-A 窯は窯体の遺存が良好で、一部ではあるが、天井部分も遺り、本市においてははじめて、大阪府北部地域においては、豊中市の村町下池窯につぐ第2遺例となった。

34-Bは窯体の中間部が、後世の段畠造成に よって削り取られて上下に2分されて遺り、上 部では34-A窯の構築によって破壊された窯体 の窯床とわずかな窯壁が認められ、中央部は削 り残された焼土が痕跡程度に残存していた。下 部では段畠造成時にほぼ水平に削られた窯壁と、 燃焼部の窯床が遺存していた。次いで、堆積土 の排土が完了し、本格的な灰原調査を開始した。 灰原は34-B窯の燃焼部端から扇形に展開して いるが、窯尻から下方の地山は急激な傾斜とな り、この傾斜部分には、ほとんど黒色灰層が遺 存せず、直接地山が検出された。これにつづく 灰原末端の地山は傾斜がゆるやかになり、再び 濃厚な黒色灰層が現われる。これは灰原の中央 付近におこった崖崩れにより、灰層が下方に押 し流され末端部に堆積したものである。したが って、灰原の層序は旧態をとどめず、層序の逆



転・混入があることも予想された。

灰原を4区に区分して順次検出をつづけなが ら、窯体の清掃・写真撮影・実測を併行して実 施し、灰原の写真撮影・層序の実測、さらに埋戻 しをもつて3月31日すべての調査を完了した。

なお、3月9日(日曜日)に現地説明会を計画したが雨天のため延期し、3月15日(土曜日)午後2時より3時まで、市民約50名の参加を得て現地説明会を実施し、遺構・遺物を公開して、調査状況を説明した。



第4図 現地説明会風景

くりぬき水路

くりぬき水路は窯跡の調査と併行して調査を行い、3月26日重機械を導入して、前年の試掘 壙の現在出口寄りに、4m×4m深さ4mの掘 削を行ったが、土層は含水率の高い青色砂質粘 土から砂質土に変り、出水も激しく深さ4mを もって重機械の掘削限度に達するも遺構を発見することができず、ひとまず埋戻した。重機械操作中、雑草中にマンホールの存在することを発見し、重機械によって蓋を排除して内部を点検した結果、このマンホールが、現出口にでで点検したヒューム管と角形水路の接続点に設置されたものと推定された。この山側につづく角形水路が、創設時のものが否かは、外部よりの観察のみでは確認できず。3月29日重機械を大形のものに変更し、前年度検出した補修跡とマンホールの中間を4m×5m深さ4.3m掘削して、コンクリート造りの角形水路の上蓋を検出した。

しかし上蓋清掃中も周壁の崩壊が相つぎ、作業者の危険を考慮して写真撮影をもって検出を中止した。3月31日は夜来の降雨をもって現況が泥状となったなかで、山裾の等高線変換地点に重機械をすすめ、4m×4m深さ3mを掘削して、3月29日検出したと同一構造の角形水路の創設時出口とコンクリート造り角形水路のが接点は、なお山寄りに存在するものと推定し、山裾に掘削壙を拡大したが重機自体が、掘削壙の周壁をお出るり、作業を終止するを止むなきに至った。この調査により、等高線変換地点にから現出口の間に至る水路は、その伏設時を究明するには至らなかったものの、保存状況がかなり良好であることは判明した。

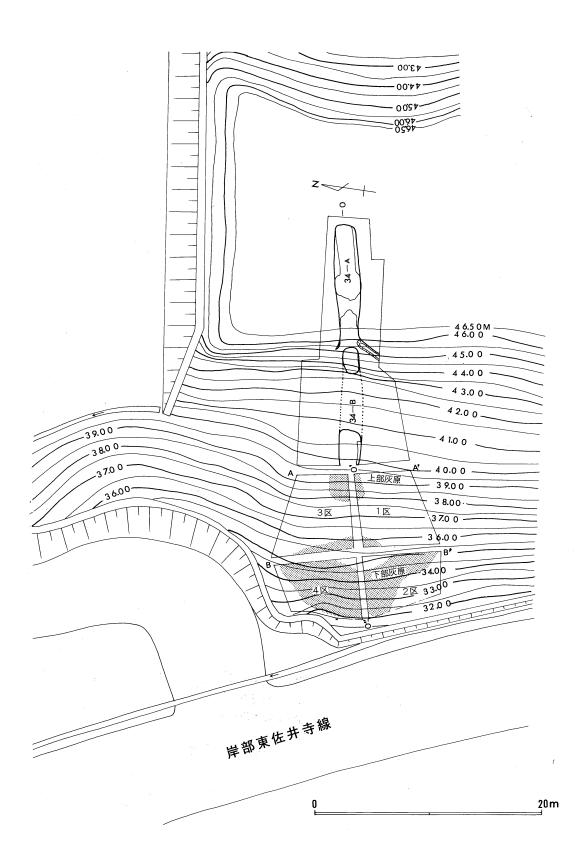
第4章 34号須恵器窯跡の調査

(1) 窯の立地

佐井寺の集落は、正雀川の支谷が形成した標高30m~50mの、小段丘を立地とする集落である。したがって集落は四方に洪積丘陵を背負い、わずかに東北方にむけて支谷を開口し、この支谷をめぐって段水田が造成されている。集落の東北端より下流の支谷は、千里ニュータウンと佐井寺を分界しているが、支谷をめぐる水田は現在ほとんど宅地化し、府道山田佐井寺線の工

事によって消滅しようとしている。この支谷の 東南側は、集落の西南からのびてきた洪積丘陵 が、ゆるやかな起伏をもちながら釈迦ヵ池にま でのび、51号須恵器窯跡の発見された標高51mを ピークに、複雑な支丘陵を構成している。集落の 東側に標高46mの支丘陵が南から北へむけて伸 び、その先端にちかく、西面する斜面の上方に34 号須恵器窯跡が構築されている。

この丘陵と谷部は比高約18mで、かなり急な

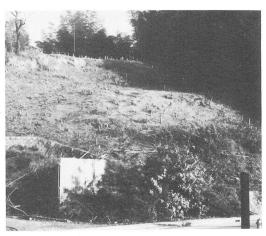


斜面となっているが、窯体はその斜面の最上 部に築かれ、灰原は谷底にまでおよんでいる。

窯体は34-A・34-Bと2基あるが、良好に遺存したA窯をみると標高44m付近を焚口とし、最上端は標高47mまでおよんだと思われる。丘陵頂部がすでに畠地として平坦化されており、これによって窯体上端が削平されたらしく、煙出部は消滅している。これは窯体上端の切断面に歴然とあらわれている。B窯は標高39.2mを焚口としており谷底までの比高は約10mである。したがってB窯もやはり斜面の上方を選んで構築しているといえる。A・B両窯とも主軸線をほぼ同一にとり、丘陵の等高線に直交して構築していることが測量により認められた。

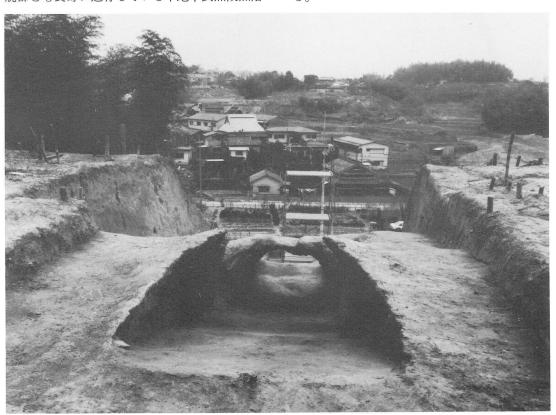
(2) 窯体の構造

34-A窯跡 この窯は焼成部上端と焼成部中間の側壁の一部を欠失しているが、焼成部・燃焼部とも良好に遺存している半地下式無段無階



第6図 34号窯跡の景観

式の登窯(窖窯)である。主軸方位はN-82℃ Eで、窯体の残存部全長は10.85m、窯巾1.84m~ 1.44mの比較的均正な構造の窯体であるといえ る。



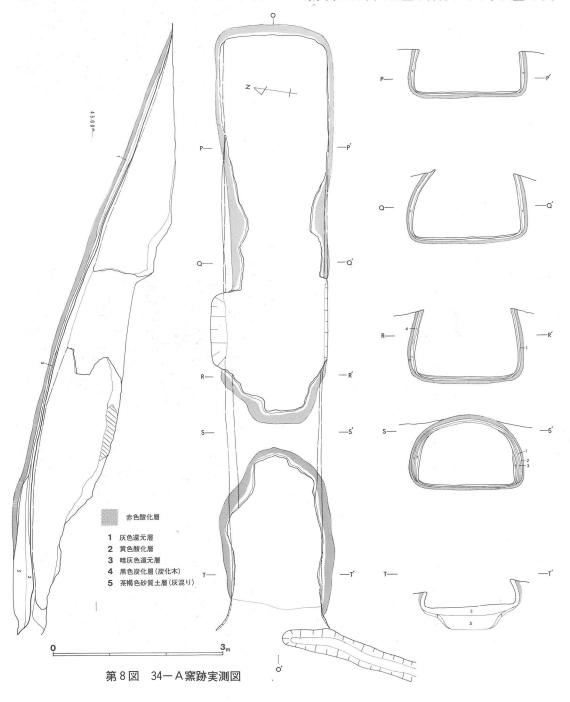
第7図 上方からみた34-A窯跡

平面形をみると、最大巾は焼成部先端付近にあり、焼成部下端から燃焼部にかけて序々に窯巾を減少し、やや特殊な形状をしている。

床面はほぼ平滑で、焼成部は21度の傾斜で直線にのぼり、ほとんど凹凸はみられない。焼成

部下端から燃焼部へ至る窯床は、傾斜がゆるやかになり、燃焼部に至って窯床はほぼ水平となる。

焼成部の側壁は、仕上げが均正で特に上半は 最大巾が床面の立上り部分にあり、典型的な、



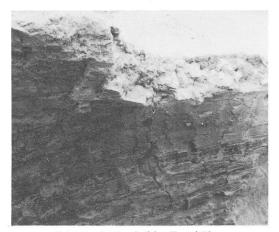
「断面かまぼこ状」を呈している。この上半部分においては窯壁の上塗り粘土は認められず、かえって精良な粘土層を掘り込んでつくったことを証明する掘削用具の刃先の痕跡が残っており、掘削用具の使用方法(右手に用具をもち右上から左下に向って操作している状況)が明確にわかるほどである。

燃焼部は巾1.58~1.44m で、ほぼ水平になっ た床面が、焚口付近でわずかに上がる傾向をみ せる。最終窯床は床面の置土が、黄赤色に被熱 し硬化しているが、この床面化した焼土混りの 置土を除くと、約0.17m 下位に築窯当時の窯床 があらわれた。この面を精査すると、全体とし ては、長径 2.29m ×短径1.18m 深さ17cmの楕円 形の落込みが検出され、この窯が古段階におい て、所謂「舟底形燃焼部」と呼ばれている落込 みをもっていたことになる。この舟底型落込み のすぐ前方では焼土がなくなり、地山の黄色粘 土層が大きく扇形に展開することより、この部 分が焚口であったことは明らかであるが、この 右側には巾35cm、深さ20cmのU字型溝が南側に 向って延びており、おそらく排水機能を有する 溝であろうことを推定させた。

なお、本窯調査上の最大の成果としては、ド ーム型天井の遺存することを確認し、これを破 損せしめることなく検出できたことである。こ のドーム型天井部は、燃焼部と焼成部の接点を 中心として、最狭部においてすら 0.8m を遺存 しており、天井部を仔細に観察することができ たことはまことに幸なことであった。この天井 部を観察するかぎりにおいて、スサ入粘土をも って天井部を構成した後、その上面に砂質粘土 を塗り重ねていたものと思われ、これも赤色焼 土化していた。この部分においては、床面から 天井面までは、1.3mを測り、小腰をかがめる程 度の姿勢で窯詰・窯出し等の作業ができること が判明した。1mにも満たない天井部の残存で はあったが、窯体の天井高を確認し得たことは、 大きな成果といえよう。またかかる天井部を遺 存する窯跡を発見調査したのは本市では初例と なった。



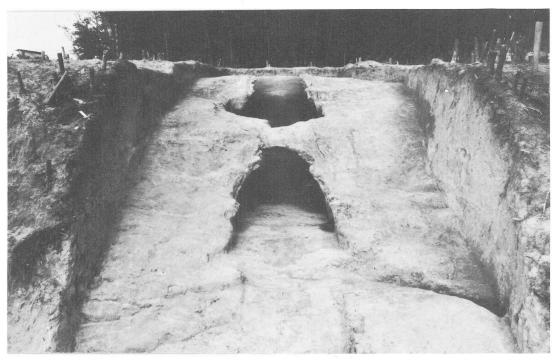
第9図 34-A窯跡側壁



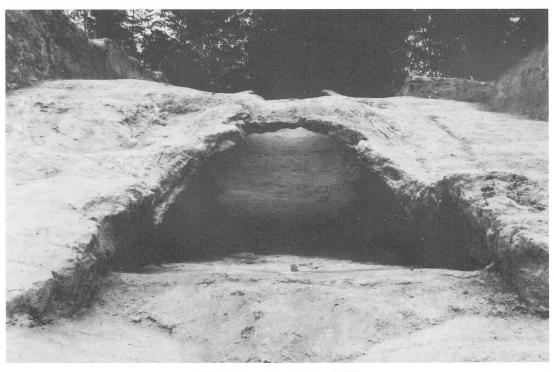
第10図 側壁の掘削工具の痕跡



第11図 焚口及び排水溝



第12図 西方よりみた34一A窯跡



第13図 焚口よりみた34-A窯跡

34-B窯跡 この窯は焼成部の上端が失われ、後世に行われた畠地造成によって、燃焼部床面と焼成部上半の床面と右壁のごく一部を除き、窯体の大部分は破壊せられている。このため窯体は焼成部上半の一部と、燃焼部に二分されており遺存度は非常に悪い。

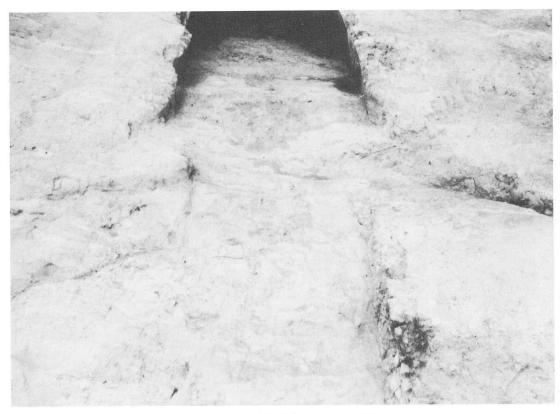
昭和53年度に行われた試掘調査時、確認されたのは、このうちの焼成部上半床面と右壁の一部の断面である。

窯体の遺存部分を計測すると、全長9.70m、焼成部巾1.45m、燃焼部最大巾1.70mを計測する。焼成部の床面は主軸長2.60mが残されているのみであり、この部分の傾斜は30度をもって直線的に登る構造である。砂質粘土の地山を掘り込んで構築したため、窯壁がもろい。スサ入粘土で上塗りをした痕跡もみとめられなかったが、あるいは剝離したのかもしれない。窯床では、暗赤色に被熱した硬質の砂層が検出された。こ

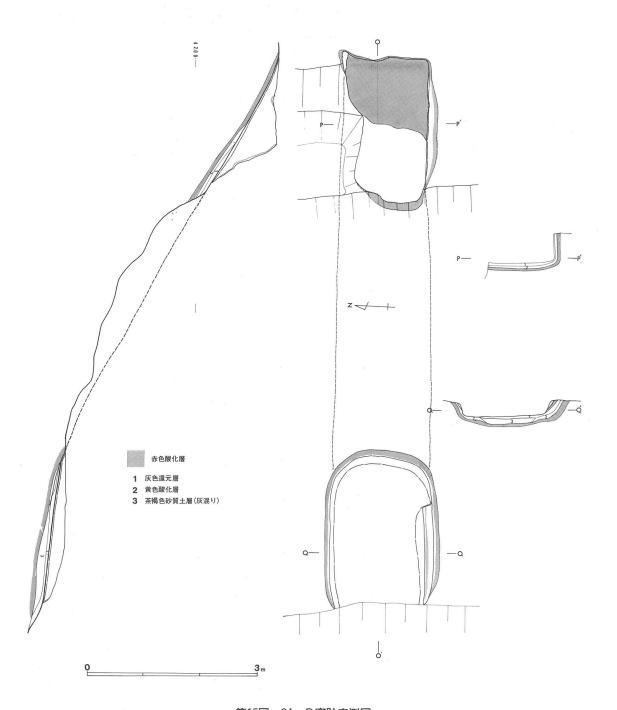
の部分以下では流失によって、わずかな赤色焼土と崩壊流下した窯壁をみとめるのみで、明確に検出された部分は、焼成部下端とそれに続く燃焼部と、焚口からその前庭に展開する灰原である。

燃焼部の床面は2枚みとめられ、地山黄色粘土の黄白色酸化層上に、炭・焼土・窯壁塊などの混合した置土が20cmの厚さで敷かれ、その上層はさらに灰色に被熱していることから最終段階における床面であることがわかった。この床上げに際して右側壁のみを15cm内側に貼りなおしたため、窯体巾もそれだけ狭くなっている。したがって右側壁のみが明確に2枚であることが認められる。

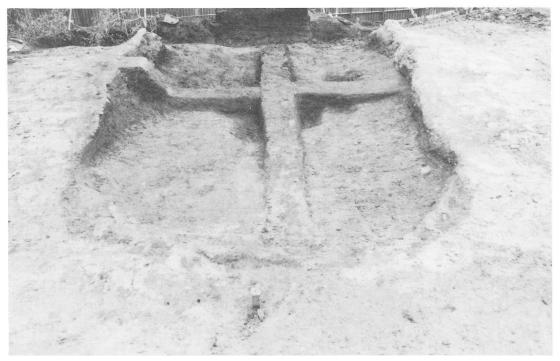
後日B窯を廃棄して上段にA窯を構築したのは、前述したB窯の地盤の劣悪さによる経営の困難さから離脱を図ったことによるものであろう。



第14図 34-B窯跡焼成部と34-A窯跡



第15図 34-B窯跡実測図



第16図 34-B窯跡燃焼部

(3) 灰 原

34-A・B 両窯は、ほとんど主軸を一にして 上段と下段に縦続する形で構築したため、灰原 は同一地点に重複し、かつ長年月にわたって下 方にむかって流下したため、A・B両窯の灰原 を峻別することは不可能であった。34-B窯の 焚口下方に堆積する若干の灰層はみとめられる が、その下方は急激な斜面となって、地山の軟 弱な細砂層が露出し、灰層は一部断絶している。 最下方に至って地上の傾斜がゆるやかになる部 分に濃黒色の灰層が、多量の須恵器を包含して 集中的に堆積し、その厚さは最大部分で0.8mに も達した。このうち窯体主軸方位において、灰 原の断層があり、上方から流下堆積したと思わ れる、精良な黄色粘土と白色粘土が互層をなす 大粘土塊があり、これを中央にして、東・西・ 北と分断された形となっている。

これらの状態を観察すると、斜面中腹から下方にかけて、大きな地滑りがおこり、B窯直下の灰層を残して、灰層の大部分が最下方に押し

流されて堆積し、灰原を二分したものと理解で きよう。

このように灰原自体は、両窯の操業期における前後関係を把握するには困難が多いが、灰層を $1\sim4$ の各区に分け、各区において分層的発掘をした。

さらに窯体構築の状況と窯体内で発見された 遺物によって、あらかじめ把握された操業期と を比較検討することによって、次のような理解 に到達した。

まず、B 窯焚口の直下にのこされた黒色灰層は、大半がA 窯のもので、出土遺物も新しく、また主軸上の土層断面をみると、B 窯床面堆積土とは明らかに分離でき、即ち灰層が上方から流下してきたものであることを示している。すなわちB 窯からかき出された遺物と、A 窯からかき出された遺物が、この灰層の下方では少量の混合があることは考えられても、黒色灰層の主体はおおむねA 窯から排出されたものと考えることが最も妥当であると理解した。

つぎに4区に分けて、分層発掘を実施した最下部の濃黒色灰層は、予想に反して層序がよく保たれており、概ね下層と上層の器形の時期的な変化を表わしており、すなわち古い方が下層に新しい方が上層へと堆積する傾向を示してい

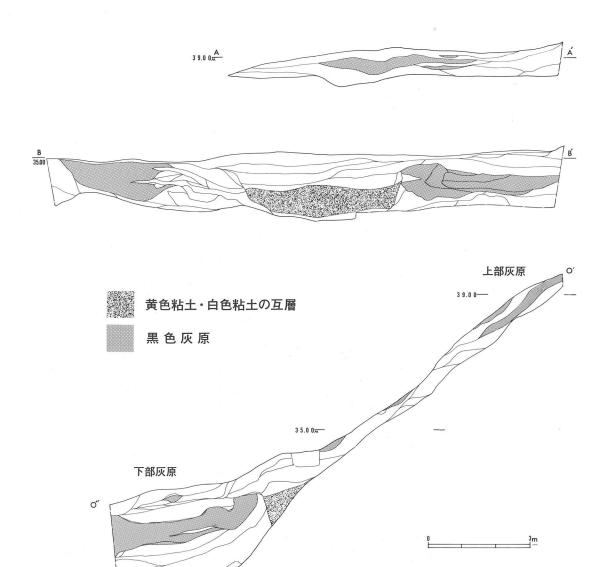
る。とくにA窯操業期に比定できる新しい段階の須恵器は上層にのみ堆積していた。つまりA・B両窯の灰層が重層しているにせよ。A窯の灰層は上層において少量がみとめられるにすぎないといえる。



第17図 下部灰原断面 (2区)



第18図 下部灰原断面 (3区)



第19図 灰原土層図

(3) 出土遺物

今まで述べたように本窯は34-A・B窯の2 基が主軸を同じくして構築されており、その各々の窯を区分して、出土遺物を考察すべきである。しかし、灰原にあっては両者の遺物が混在しており、厳密な区分は不可能であるといえる。幸にも本窯の構築された時期は、6世紀を通じて継続してきた古墳時代須恵器の器形が、大きく変化する時期であり、34-A・B窯については、出土遺物にも大きな差異が認められる。し



第20図 灰原における甕出土状態

たがって窯体内出土資料との対比によって、両 窯灰原の遺物の位置づけは可能であり、この点 については前節にも述べたとおりである。これ をふまえて、34-A・B窯と灰原の層位の関連 を表にすると次表のようになる。

窯跡	床	面	対応する灰層							
34— F	古(第1	次床面)	7.WCG.1							
34-1	新(第2	次床面)	下部灰原中・下層							
24 A	古(第1	次床面)	上部灰原·下部灰原上層							
34—A	新(第2	次床面)	上部灰原・下部灰原上層の堆積上							

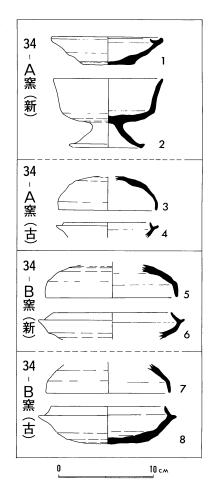
第1表 遺物の出土位置と層序区分

窯体内出土遺物 案体内出土遺物については 床面に密着した遺物を基準にし、 $A \cdot B$ 両窯で みられた各々2段の窯床のうち、古い段階を、 (古)、新しい段階を(新)とした。したがって窯 床面を基準とすれば、古いものから新しいもの への変遷は、34-B (古) $\rightarrow 34-B$ (新) $\rightarrow 34-A$ (古) $\rightarrow 34-A$ (新) と移行する四つの段階が明ら かである。各段階における窯床の出土遺物は、 焼台として使用されたと思われる大型甕の破片 を除くと、概して少なく、杯を主として図示し たのが、第21図である。

34-B窯は、(古)・(新)とも杯器径が14~15cm クラスで、概して大きく、立ちあがりは内傾が 著しいものの、まだかなりの高さを保っている。 杯身・蓋ともに器底・天井部のヘラケズリ調整 も明確に残っている。34-B窯の古・新両段階は、形状・調整ともに大差なく、形状の変化も生じていないといえる。

34-A窯は、古段階の検出資料が微量であるが、杯は明らかに10~11cmに小型化し、立あがりも3mmと低く、大きな形態変化がおこっている。しかし身と蓋の形態が逆転したもの(かえりを有するつまみ付杯蓋)はみられない。

34-A(新)の杯(1)は立ちあがり受部が、口縁より内側に入り、水平位置では外からはみられないほど退化している。また底部にはヘラケズリ手法がみられず、回転ヘラ切りで未調整のままである。受部の形状からみて、つまみ付杯蓋の受部とほとんど同一であり、(1)は、杯



第21図 窯体内出土須恵器実測図

蓋とも考えられるが、器高が大きいこと底部の 仕上げが粗雑で、蓋の天井部とは考え難く、形 態逆転直前の杯身とした。

形態逆転後のつまみ付杯蓋は34—Aの窯体内から細片で検出されたほか、灰原からも検出されており、34—Aの(新)段階で、杯の形態の逆転がおこっているといえる。したがって34—Aの第2次床面は両方のタイプの杯が併せて出土している。34—A(古)の段階で同様な所見があったかどうかは資料が少なく不詳としかいえないが、34—A(古)段階の杯(3・4)の形態・調整上の特徴からみて、逆転はおこっていなかったとするのが妥当であろう。

灰原出土の遺物 灰原は、34-B窯直下の傾斜面に遺された灰層を上部灰原とし、傾斜面の谷にちかい部分に遺された灰層を下部灰原とした。

前者については灰層も薄く、層位的な発掘は不可能であったが、後者は最大灰層厚が80cmあり、上層・中層・下層に区分して遺物をとりあげた。

上部灰層出土の須恵器は、器形から判断すれば、大半が34—A窯期に属するものであるが、34—B窯期に属すると思われる杯蓋(13)などもある。調査所見では、B窯の未端部を一部削って、A窯の灰層が流れており、一部において両者の遺物が混在したのであろう。

(9)~(12)は最も小型化したタイプの杯・杯蓋である。さらに新しいタイプである。「かえりを有するつまみ付杯蓋」も遺存が悪く実測できなかったが、数点出土しており、上部灰原は34-A窯の古・新2段階にわたるものである。短頚壺(14)は、口縁部の立あがりも少なく、短蹄程度となっており、下部灰原中・下層出土のものと明確に対比できる。甕(15)は肥厚した口唇部の直下に突帯を有するもので、浅い1条の凹線で画された文様帯に、波長の長い特異な櫛先波状文を描いている。下部灰原中・下層ではみられなかった新しいタイプの甕で、杯の形態変化に止まらず、甕などにも新しい変化が及んでいることを示している。

(16)は「盤」あるいは「皿」といえるものであり、台脚部を有するかどうかは不明であるが、観察一覧表には「盤」としておいた。口縁の形状は側部からややコーナーをもった調整を行ない、さらに口端を上方につまみあげており、や複雑な仕上げをしている。所謂「盤」は、この上部灰原及び、下部灰原上層から少量出土しており、おそらく34—A窯にともなうものであるう。

下部灰原上層堆積土出土の遺物は、下部灰原 上に流入堆積した黄色土等に混在していたもの で、上部灰原が流失した時のものと考えられる。 したがって上部灰原出土遺物と層序的には同等 のものと考えられ、杯蓋(17)及び杯(18・19)はいずれも上部灰原出土遺物と形態的にはかわらない。このうち(17)は、かえりを有するつまみ付杯蓋で、口縁部内面のかえりは、水平にみた場合口縁下に出ないほど退化している。つまみの形状は乳頭状にちかい擬宝珠形を呈し天井部はヘラケズリ調整で仕上げている。

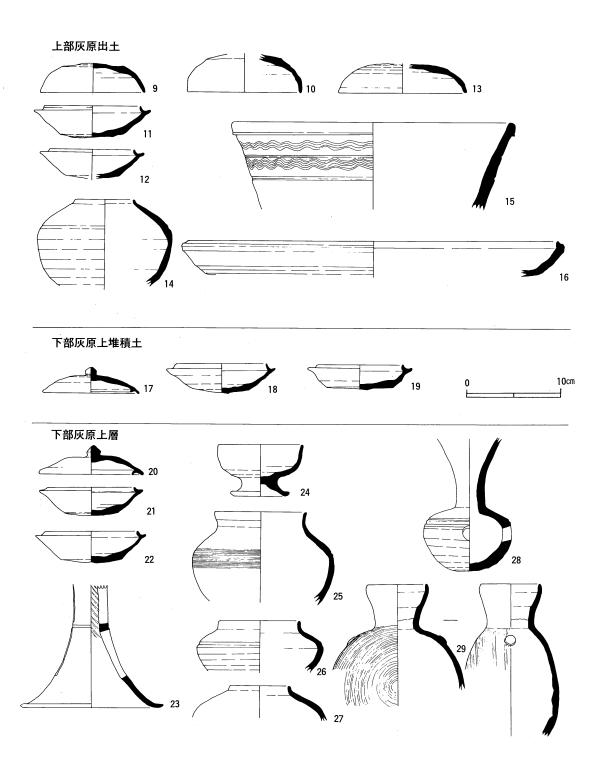
下部灰原上層出土の須恵器は、堆積していた 黒色灰層の概ね最上層からマイナス20cmまでの 間で検出されたものである。中層でみられるや や大器径の杯を含みながらも(20)~(22)のよう な小型化した杯・杯蓋および、かえりを有する つまみ付杯蓋がみられた。高杯(23)は高脚の 2段すかしをもち、すかしは狭い長方形のもの が2方に穿たれている。脚柱部の凹線は浅く、 1条のみで、脚裾部の凹線は全く省略されてい る。

(28) は聴で口頚部は細く、大きくラッパ状にひろがる口縁をもっている。提瓶 (29) は内湾しながらたちあがる口縁部と、肩部に付された豆状に退化した「耳」をもつことが特徴である。出土提瓶の大半はこのタイプであるが、少量ながら鉤状のもの、環状のものも認められている。

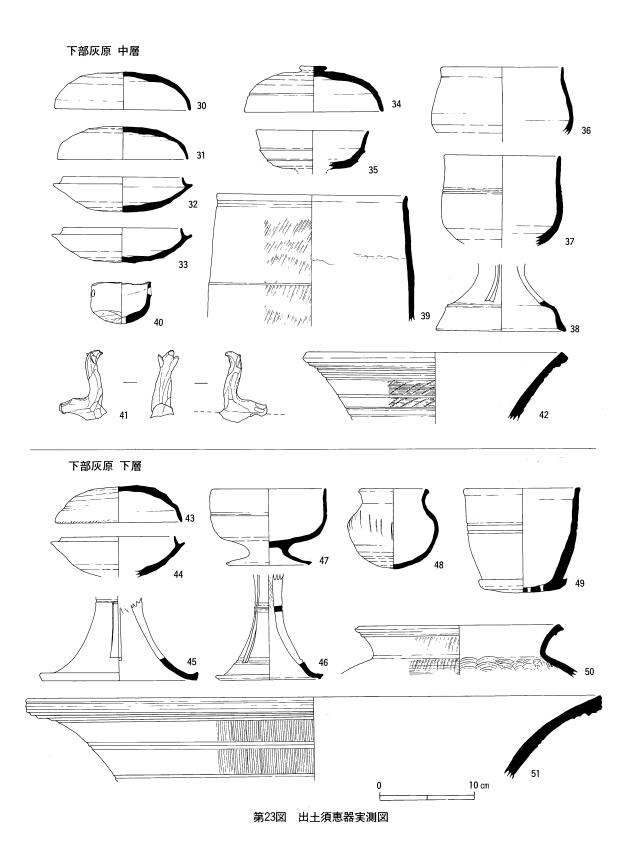
下部灰原の中層から出土したものは、杯・杯蓋については器径が14~15cmのものであり、同上層でみられた小型化した杯は全くみられない。このことからも灰層堆積層は、上と下であきらかな時期差を表わしているといえる。

(36)・(37)は、やや深い椀形土器で、脚台部がつけられていたかもしれない。(40)は器径6.2 cm・器高4.4cmのコップ型土製品であるが、側部に2ヵ所、底部に1ヵ所の円孔があり、底部は手持ちヘラケズリ手法により仕上げられている。口端はヘラ状のもので鋭利に切られており、土器というより特殊な土製品とみるべきであろう。(41)は装飾土器に付された動物であるが、取付面の状況からみると装飾壺ではなく、浅鉢形器台の鉢部口縁にのっていたものらしい。

下部灰原下層から出土のものは、杯の器径・ 形態ともに中層のものと変るところはない。



第22図 出土須恵器実測図



(47)の台付椀は(37)より古相を呈するものかもしれない。高脚高杯は、大・小2ツのタイプが出土しているが、いずれも長方形のすかしが3方に穿たれている。同一のタイプは下部灰原の中層~下層でのみみられ、上層ではみられない。すかしの穿孔方向が3方に開くものから2方に開くものへと変化したことを本灰原出土の資料が証明している。脚端部は断面三角形に肥厚するなど装飾性を加味している。また(46)の脚部凹線も脚柱部と脚裾部に各2条づつが明確にみられ、(45)については、脚裾部の凹線のみ省略されている。高杯の脚部におけるすかし孔と凹線の組合せにも、杯の大きな器形変遷に対応して微妙な変化をみせているようである。

以上、本窯各部出土の須恵器を、その出土部位に即して、特徴とするところを略記した。出土遺物は莫大な量にのぼり、最終的にはすべての整理を完了して詳細に述べられようが、さきにも重ねて述べたように、本窯の経営期は、器形の大きな変化期にあたり、その過程の解明は、形態編年上の問題に大きく寄与しうるものと期待される。また吹田市域における須恵器窯跡の最終段階にちかく経営された窯として、最も内容的に充実した資料を検出することのできた窯として、特筆されるべきである。実年代としては、7世紀初頭を中心とする2~30年の間に操業されたと考えることが最も妥当ではないだろうか。









29

40

第24図 出土須恵器 写真

ST-34 遺 物 観 察 表

第2表 出土須恵器観察表 (1)

出土位置	器 種	法 量	個	Þ	Ø	特	徴	色	調	胎	土
A	杯 身	口 径: 9.0cm 受部径:11.2cm 器 高: 3.0cm		は丸い。	底部は平底		短く外反して り離し後未調		赤褐色 淡赤褐色	1mm位の自 数含む。*	
新	高 杯 2	口 径:11.4cm 器 高: 7.3cm 脚部径: 7.0cm 脚部高: 2.6cm	杯部底部はそ 上り、丸い端端部で短かく へラ記号。	譜部に至	る。脚部は	外反し		内外继	沂:暗 灰色	白色砂多数粗	対含む。
A	杯 蓋 3	口 径:10.4cm					味に下り、端 り、回転ナデ		: 淡灰青色 : 明灰色	白色砂多数	文含む。
古	杯 身 4	口 径:8.8cm 受部径:10.8cm	たちあがりに 部は外上方に				部は鋭い。受	外内と	听:淡青灰色	0.5~1mmの 多数含む。	
В	杯 蓋	器 径:15.4cm 残存高: 2.8cm	内傾が著るし ヘラケズリ訓					内外圈	新:灰色		
新	杯 身	口 径:14.0cm 残存高: 3.5cm	口縁が直線的ヘラケズリ訓					内外账	听:灰色		
В	杯 蓋 7	口 径:13.0cm	口縁端は内質る。端部は対				ほぼ垂直に下 ナデ。	内外继	听:灰色	白色砂含も	٢.
古	杯 身	口 径:12.0cm 受部径:14.6cm 器 高: 4.0cm	底部はほぼ ^円 端部は丸い。				内傾してのび 端部は丸い。	外: 内:	県灰色〜灰色 で色	白色砂含も	٠.
	杯 蓋	口 径:11.0cm 器 高: 3.1cm	口縁部は内質 らで、切り 釉。	浮気味に 進し後未	下り、端部 調整。外面	は丸い 一部に	。天井部は平 暗緑色の自然		: 青灰色 : 淡青灰色	白色砂多数粗	対含む。
上	杯 蓋 10	口 径:12.0cm					、端部近くで は切り離し後	内外と	所:暗 灰色	1 mm以下の 白色砂多数	
	杯 身 11	口 径:8.8cm 受部径:11.0cm		び丸い	。底部はほ		は丸い。受部 で、回転ナデ		· 暗茶褐色 · 黒褐色	白色砂含	t.
部	杯 身 12	口 径:10.2cm 受部径:12.4cm 器 高: 3.3cm	たちあがり、	端部は	比較的鋭い	。受部	近くで垂直に は外方にのび 整。焼成はあ	内外继	所:暗赤褐色	白色砂多数	対含む。
灰	杯 蓋 13	口 径:13.6cm	口縁部は内容			は丸い	。天井部は平		:暗灰色 :灰色	白色砂含も	少。密
7	短頸壺 14	口 径: 6.0cm 残存高: 9.2cm		弱く、	体部との境	に凹線	部はややなだ を有す。体部 釉。		: 淡青灰色 : 灰色~ 黒灰色	白色砂多数	対含む。
原	獲 (口頸部) 15	口 径:24.8cm 残存高: 9.1cm		ゥや角は	である 口頸部	には2	条の凸線が巡 条、凹線が巡 の自然釉。	内外图	沂:灰色	白色砂含	٢.
	盤 16	口 径:39.2cm 残存高: 3.7cm					屈曲して内傾 転ナデを施す。		: 黒灰色 : 暗灰色	白色砂多数	飲含む。

出土位置	器 種	法量	個	√	Ø	特	徴	色	調	胎	土	
下部灰	杯 蓋 17	口 径:10.0cm 器 高: 2.8cm つまみ径:1.2cm つまみ高:0.8cm	天井部は丸内 程度の内面に みは高く、携	こ、ややタ	┡反するか			外 :	黒灰色~ 灰 黒灰色		多く含む。	
原上堆	杯 身 18	口 径: 9.5cm 受部径:13.4cm 器 高: 3.1cm	たちあがりに は上外方にの 後未調整。					外:河内断:河		白色砂台	計	
積 土	杯 身 19	口 径: 9.0cm 受部径:11.0cm 器 高: 2.7cm	く外反し、第	譜部は丸い	'。受部は	上外方に		外:黑原 内:淡原 断:灰刻		色白色砂色	含 む。	
	杯 蓋 20	口 径:11.0cm 器 高: 3.1cm つまみ径:1.4cm つまみ高:1.1cm	天井部はほぼ 程度の内面に く擬宝珠様を	内傾する	るかえりを	:有する。	つまみは高	内断:原	灭色	白色砂約粗	多数含む。	
下	杯 身 21	口 径: 9.0cm 受部径:11.0cm 器 高: 3.0cm	たちあがりに はほぼ水平に し後未調整。	このび丸い	1。底部は	ほぼ平ら		内外:師	音青灰色音灰色	白色砂釘	多数含む。	
部	杯 身 22	口 径: 9.8cm 受部径:11.4cm 器 高: 3.3cm	たちあがりに 方にのび丸い 整。外面暗線	。底部に	はほぼ平ら			内外断	: 灰色	白色砂组	多数含む。	
灰	高 杯 23	脚部径:14.0cm 現存高:13.0cm	上位 ま はほほ 部で外方への 2条巡り、そ が外から内へ 外面、暗緑色	び、端音 の上下に な な な な な たれて	₿は丸い。 2二方に細 ないる。内	上位まに 長い長力	:浅い沈線が i形スカシ孔	内外断	:黒灰色	1 mm位の 数含む。)白色砂多	
	高 杯 24	口 径: 8.8cm 器 高: 5.4cm 脚底径: 5.2cm 脚 高: 2.0cm	部は丸い。肽	部は外屋	えして下り	、端部は	強く屈曲し	内:淡黑外:淡雪			1mm位の白色砂多 数含む。	
原	短頸壺 25	口 径: 9.6cm 残存高: 9.8cm		長りは弱く	、体部と	の境に2	条の沈線を	内外断	:淡灰紫1	色 0.2~0. 砂含む。	3mmの白色	
上	短頸壺 26	口 径: 8.8cm 残存高: 5.3cm	口頸部は垂直 較的強く、体 ラ削りは、消	*部との境	竟に凹線を			外内断	: 淡青灰1	色		
層	瓦泉 28	基部径: 3.4cm 体部径: 9.4cm 残存高:14.0cm	方に外傾して	下り、体 後、内弯	▶部最大径	より上に	3条凹線が	外:灰色内:灰色		1~2m 多数含t	mの白色砂 テ。	
	提 瓶 29	口 径: 6.2cm 残存高:16.1cm	口頸部はややにのびる。端はボタン状。					内:淡清 断:淡刻 外:暗灰0		砂多数含	3mmの白色 含む。	
下部	杯 蓋 30	口 径:14.1cm 器 高: 3.9cm	天井部は丸味 近くで垂直に			下外方に	下り、端部	外:淡原 内:淡原 断:灰色	K色	0.5~1m 多数含 t	mの白色砂 い。	
灰原	杯 蓋 31	口 径:13.6cm 器 高: 3.5cm	天井部は丸味 は丸い。灰を					外:淡漬 内:暗点 断:セ	黒灰色	0.5~1m 含む。*	mの白色砂 fl	
中層	杯 身 32	口 径:12.6cm 受部径:14.8cm 器 高: 3.7cm	たちあがりは 外方にのび丸		てのび、端	部は丸く	、受部は上	内外断	:暗灰色		ドの細かい 告干含む。	

出土位置	器 種	法 量	個		の	———— 特			色	調	胎	10 E/L 275 3	土	
	杯 身 33	口 径:12.4cm 受部径:14.7cm 器 高: 3.7cm	たちあがりは は上外方にの			、端部は	丸く、受			暗青灰色 赤茶灰色		 数含む。	粗	
下	有 蓋 高杯蓋 34	口 径:14.6cm 器 高: 4.8cm つまみ径:3.0cm つまみ高:0.6cm	口縁部は内弯 井部は丸味を が巡る。]外断	:淡灰色	白色矿	 沙含む。		
部	無蓋高杯 (杯部) 35	部) 部は丸い。底部下位と口縁部との境に各1条の凸線 内:灰白色						白色和粗	白色砂多数含む。 粗					
灰	椀 37	口 径:12.2cm 残存高: 9.4cm	有し、そこか	ずかに内弯しながらのび、2条の凹線を からわずかに外反しながらのび、端部は は深く丸味を持つ。					白色和	沙多数含	きむ。			
	台付壺 (脚部) 38	脚部径:13.4cm 残存高: 7.2cm	中位まで外反 分は外下方へ 呈す。三方に	内弯して	て開き、端	部は内傾	する平面	īを 外		灰青色 灰茶色 〃	白色研	少微量含	さ む。	
原	器形不明 39	口 径:19.8cm 残存高:13.3cm	ゆるく内傾し 端部は内傾し した後、回転 す。	て平らな	な面を呈す	。外面は	タタキを	施内	·:淡]:灰 f:黒		白色码	沙含む。		
中	不 明 40	口 径: 6.2cm 器 高: 4.4cm	底部は丸味を 端部はヘラで 底部中央1、(雑に切り	の不整形。	底部は手	持ヘラ肖	りり。]外:)	灰色	白色矿	沙多数含	含む。	
層	動 物 41	高: 7.3cm 長(胴部):4.7cm 幅: 1.9cm	一部暗緑色のた耳が特徴的		有。装飾代	器台か。	ピンと立	エっ 灰	色		白色研	沙含む。		
	長頚壺 (口頸部) 42	口 径:27.0cm 残存高: 7.3cm	内傾する平	面を呈す そ巡らし	- 。上位 3 ノ、3 条の	むい凸線を有し、端部は、 2位3条・以下不定間隔に 条の凹線より下にカキ目を 握す。			-断:i 内 :	暗紫灰色	白色研	白色砂含む。		
-	杯 蓋 43	口 径:13.2cm 器 高: 3.9cm	口縁部は内弯 部はやや丸味			、端部は	丸い。天	内		灭黄色 灰紫色 〃	白色石	沙含む。		
下	杯 身 44	口 径:12.1cm 受部径:14.1cm	たちあがりは 鋭い。受部は 持つ。							紫灰色 青灰色	白色研	沙含む。		
部	高 杯 45	脚部径:16.2cm 残存高: 8.6cm	外反して下り へつまみ出す 部に凹線を巡	。三方に	こ細長いス	カシを穿			外: 断:	灭黒色 灭色	白色矿	沙多数含	含む。	
灰	高 杯 (脚) 46	脚部径:10.8cm 残存高:11.1cm	脚裾は外反し び、屈曲して その上、下方	端部に3	至る。中央	部に2条		1	外断	:暗灰色	白色研	沙多数含	きむ。	
原	台付椀 47	口 径:12.0cm 脚部径: 8.9cm 脚部高: 2.0cm 器 高: 8.0cm	口縁部は直立 脚部は外反し 段を有す。						外:	淡紫灰色	白色矿	沙含む。	密	
下	短頸壺 48	口 径: 7.5cm 器 高: 8.5cm	口頸部は外反 肩部の張は弱 に縦方向のへ	く、底部	部は深くす]外:	淡紫灰色	白色	沙多数含	含む。	
層	すり鉢 49	口 径:11.4cm 器 高:12.0cm	体部は内弯気 巡らし、そこれ 反する。端部 小孔が十字形	いらほぼ話	垂直にのび をなす。底	、端部近 部は丸味	くでやや をおびる	外外	断:	色 淡青灰色	1	沙多数含	む 。	

第5章 くりぬき水路の調査

(1) くりぬき水路の立地

佐井寺くりぬき水路は、「中西家文書、佐井寺 山操抜水路図」に書かれたとおりで、見取り図 とはいえかなり正確なものであることは、現地 形をみてもよくわかる。

すなわち、正雀川の支谷が形成した佐井寺谷 の南から東北にむかって釈迦ヶ池に派生する洪 積丘陵の最狭部の地下をくりぬいている。

水路の現入口は、吹田市佐井寺1丁目25番地にあり、現出口は、吹田市佐井寺3662番地にある。水路はこの両地点を必ずしも直線的に結んでいるとは考え難いが、現出口付近は、昭和30年代の前半に行なわれた造成工事によってかなり変形されているので、旧出口の位置を推定できる確実な資料はない。

現在の水路出口より観察すると、比高約12mの、竹林に覆われた丘陵が、1000mにわたる湿地帯の彼方にみえる。府道岸部〜東佐井寺線は、この丘陵の最低部を越えて、一旦佐井寺支谷の最低部に降り、千里ニュータウンにはいる。

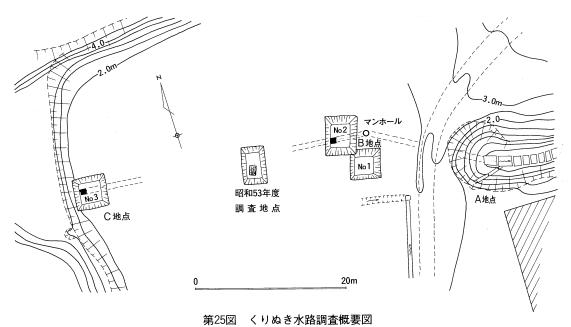
水路が道路を潜る部分は、34号窯跡の南南西150mの地点にあたる。佐井寺地区の人々が、幕藩体制下の苛斂誄求に耐えかねて、山頂にまで溜池を掘って農耕を支えた時代に、佐井寺の自然流水を釈迦ヵ池に導入しようとした岸部地区の人々が、この丘陵を操抜いた卓見は敬服すべきものであろう。

(2) 水路出口の構造

くりぬき水路の出口は、現時点で三ッに分けて考えることができる。すなわち最下流の現出口(A)・中間マンホール設置地点の(B)・中間マンホールからコンクリート伏樋の終る地点(C)である。

A地点は、昭和53年度の略調査により、明確 に把握された地点であるので、今回は調査の対 象から外した。

B地点は、昭和53年度の試掘調査時、A地点から望見した延長20m余にわたると推定されたヒューム管の終点 (A地点を原点とする半径約



-26-



第26図 くりぬき水路調査地点景観

20m) の地下状況を把握するため重機械を導入。 して試掘をはじめた。最初A~C両地点を結ぶ 直線上に4m×4m深さ4mの試掘壙を設けた が、遺構を発見するに至らず、一たんこの試掘 壙を埋め戻して、北側に試掘壙を設けるため、 重機械を操作中、雑草下の堆積土に埋れたマン ホールを発見した。このマンホールにおいてヒ ユーム管は終り、これより現入口方面には角形 の水路が開口することがわかった。マンホール の内部を点検するため調査員の入孔も考えられ たが、マンホール内における溜水より気泡の浮 上する状況より、ガスの発生も考えられ、加え て酸欠の危険も考えられたので入孔を断念し、 マンホール上から水面までの深さ4.2m、内部溜 水の深さ20cmを確認し、このマンホールをB地 点とした。

つづいて、B地点をやや離れた地点に試掘壙を設けるため、重機械を大形と交換し、4m×5m深さ4.3mに達する試掘壙で、上面巾1.2mのコンクリート製伏樋(?)を検出した。湧水による試掘壙の崩壊をおかして調査員を三度、試掘壙に入壙させ伏樋の構造確認にあたらせたが、崩土による人命の危険が予測されるに至ったので、伏樋の材質確認と上面巾の実測・伏樋の走

行方向を推定するにとどめて、試掘壙を埋め戻 した。

つづいて、伏樋と創設時のくりぬき部分の接点を検出するため、山裾の等高線変換点上に試掘擴を設けるため、昭和53年度に設定した試掘擴とB地点を結ぶ直線上を撰定して、5m×5m深さ3mの試掘擴を設けた。この試掘擴でも、前述の試掘擴で検出したと同様のコンクリート製伏樋の上面を検出し、二度にわたって調査負を入壙せしめ、伏樋の終点の検出にあたったが、この地点は前地点に倍する湧水により擴壁の崩壊が激しく、伏樋の上面巾を検出し、山側にてわずかな赤土層への掘型を発見したのみで、伏樋の終点を発見することができぬままに、埋戻しをし、かろうじて重機械が湿地帯から脱出することができた。

この調査によって、A・B両地点のヒューム管およびマンホールが、昭和30年代の前半における造成工事によって設置されたことは、ほぼ確実(ちなみにマンホール蓋には⑤のマークと、「大阪府」の文字が刻まれている)とをったが、B・C両地点を結ぶ伏樋の創設年代は詳細にすることができなかった。



第27図 B地点マンホール



第28図 試掘壙No2であらわれた伏樋

第6章 その他の調査

(1) 51号須恵器窯跡

遺跡の発見 昭和55年1月24日大阪府文化財 愛護推進委員 奥 保薬氏が、佐井寺東地区土地 区画整理事業による造成地を踏査中、31ブロッ ク地区の東西にのびる尾根の最高地点付近にお いて、若干の須恵器細片と窯壁塊を採集した。

同氏は直ちに市教育委員会に通報するとともに、大阪府文化財愛護推進委員鍋島敏也氏に連絡した。午後3時、発見者・市教育委員会・区画整理課の3者立会による検分が行われたが、本窯跡は従来の遺跡分布図には記載されていない新規発見の須恵器窯跡であることが判明し「51号須恵器窯跡」と命名された。

窯跡の発見された場所は、吹田市大字佐井寺 で小字は「清水」である。

佐井寺峠から釈迦ヶ池方面に派生する主尾根が、34号須恵器窯跡の所在する小尾根を分岐したのち、3方に分岐しようとする主尾根の最高部(51.62m)の南東側で斜面が南にむかって下る等高線変換点(標高48m)にあたり、須恵器窯跡の立地に相応しい場所である。当時発掘調査が実施されていた34号須恵器窯跡とは、小支谷をへだてながら、直線距離わずか200mの地点である。

試掘調査 昭和55年1月29日、遺物発見場所を中心に、尾根上に1ヵ所(延長50m)斜面に4ヵ所(総延長21m)の、合計5ヵ所にトレンチを掘った。その結果、尾根上に薄い赤色焼土と灰層の流れが、各1ヵ所みとめられたのみで、斜面には灰原等を想定しうるような黒色灰層や須恵器などはみとめられず、窯体・灰層を伴う窯跡としての実体はすでに失われていることがわかった。

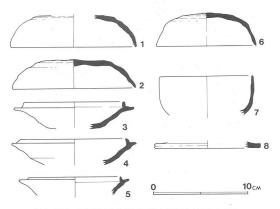
傾斜面には厚い黄色土が堆積し、畠地造成・ 竹薮経営によって相当地形が変更されていることも明らかであり、窯跡はこれらの作業によっ て破壊されたのではあるまいか、試掘調査によって、遺跡を見出すことはできなかったが、近 接地にすくなくとも1基の窯跡が存在したことは確実であり記録にとどめることとした。

出土遺物 遺跡発見時および試掘調査時に採 集あるいは検出した遺物は、須恵器11点、窯壁 塊若干であるが、さきに述べたように、いずれ も原位置を保ったものではない。

須恵器は、杯・杯蓋・高杯脚部・椀・甕などである。杯・杯蓋は直径 11~12cmの小型化したもので、立あがりも退化している。これは34~A窯跡で検出されたものと同様であり、経営期が近似している。34号窯はA・B窯を含めると前後に巾のある操業をしているが、51号窯については採集資料をみる限りにおいて、34号窯操業期の一時期に該当するものといえよう。



第29図 51号須恵器窯跡トレンチ調査



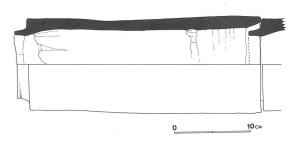
第30回 51号須恵器窯跡採集資料実測図



第31図 溜 池



第32図 瓦製樋管の検出状況



第33図 瓦製樋管実測図

(2) 農業用溜池とその遺物

吹田市は広域的には、瀬戸内式気候帯に属し 概して気候温暖で雨量の少ないのが特徴である。

千里丘陵の周縁および沖積平野においては、 水田潅漑を千里丘陵より流出する小河川および 縁辺部に構築せられた大きな溜池(釈迦ヶ池・ 竜ヶ池・馬池等)によってまかなった。それは 中・近世にのこされた文書にも伝えられている ところである。

しかし、近世初頭以降、水田の開拓が丘陵奥部の谷間にまでおよぶとともに、谷間の小水田・畠地に供給すべき水を確保するため、小支谷から丘陵頂部にまで多数の小規模な溜池がつくられ、佐井寺東地区土地区画整理事業地域内にも総数20数個所を数えることができる。これらの溜池は近世期のものが大多数を占め、丘陵頂部の地山を掘り凹めてつくった通称皿池とよばれるものと、小支谷を堰きとめてつくった堰止池の二ツのタイプ(あるいはその折中タイプ)がある。今回の工事により、池断面が露呈されたことにより、漏水防止のため、粘土層を巧みに利用して構築していることが明確にされた。

これらの溜池の大部分が二段の配水用樋管と 蜂の巣を設備し、下段の樋管より配水するため には、関係農民の重大決意が必要とされたとの 伝承がある。幕藩体制下における農民の苦衷を よく表わすものといえよう。

これらの樋管のうち、瓦質製玉縁付のものは 内面に布目を残す古相のものと、布目をすりけ した新相のものとがあるが伴出遺物がなく時期 的な判断をするためには多数を調査して、体系 的な分類をする必要がある。また樋管の中には レンが質に堅固に焼かれたものがあり、少数の 被見ではあるが、二段に築かれた上部の池にお く見うけられるようである。この樋管の方が前で は、佐井寺東地区土地区画整理事業地区第31ブ ロックで採取された、瓦質製樋管をとりあげ、 その伏設状況と樋管の一例を、写真および実測 図によって記録にとどめるものとする。

(3) 遺跡の分布調査

なお前述した調査に付随して、区画整理地内の全域にわたって、パトロールを操り返し、新たな包蔵地の発見につとめた。このパトロールは大阪府文化財愛護推進委員や吹田郷土史研究会(池田半兵衛会長)をはじめ、地元有志も積極的に推進された。

特に『佐井寺村誌』にのみ記載されている、「山田兵庫頭城跡」を求める地元住民の意識が強く、尾根筋のパトロールも操り返された。しかるに明確な遺物や現地形によって、それと確信

できる所見は得られなかった。あるいは佐井寺村誌の伝える「村ノ南ヨリ巽ニ跨ル二丁ニアリ 敗滅年暦不詳……」とあるから、主として踏査 の対象となった丘陵の西側にあることも想定し てよかろうか。

しかし、このパトロールの一環として、新たに51号須恵器窯跡が発見され、農民苦衷の結晶である溜池の状況の一端を把握できたのは、本パトロールの成果であり、その詳細は本章の第1項・第2項に述べたとおりである。

第7章 総 括

(1) 34号須恵器窯跡

窯跡の構造

前述したように34号須恵器窯跡は、主軸を同一にして前後に築かれた2基の窯跡が明らかにされ、それぞれを34-A・34-B窯とした。双方の窯はいずれも、2枚の窯床が検出され、それぞれを(古)・(新)とし、各窯を通じて計4段階の経過を認めることができた。

構築された窯体は2基が縦に連続した形となり、市内では初例といえる。

両窯はA窯がB窯の先端を削っていることから時期的な前後関係が明らかであるが、両窯が主軸をほとんど同一にしていることから、両窯の操業期に間隙はなく、B窯の操業が終止されて直ちにA窯の構築に着手したと考えられる。のちに述べるように、窯跡各所からの遺物の要相をみると、層序的な関連と遺物の編年観からみとめられる器形の推移が、両者何ら矛盾なくみとめられ、その間に空白時期はなかったことを裏付けているといえよう。

両窯の規模をみると、B窯がA窯に比して焼成部床面の傾斜をやや急にとっている点及び、 窯体巾はB窯がA窯に比してかなり狭くなっている点に相違があるが、窯体全長はほとんど同一であったと考えられる。したがって焼成量か らみると、A 窯がかなり大型の窯になっている。 この時期の窯がやや大型化することは泉北陶 邑窯においても指摘されており、北大阪と南大 阪で同じ結果が示されたことになる。

34-A 窯は窯体の最上端 (煙道部付近) が、 丘陵上端の開墾によって削平されており、焼成 部中間で、一部の窯壁が剝離されているほかは、 窯体の保存はよく、焼成部下端においては、天 井ドームが遺存していた。部分的にせよ天井部 が遺存していたのは、市内須恵器窯跡としては 初めての例で、豊中市の村町下池窯跡例を含め ても、千里古窯跡群中においては第2例目とな った。天井部がドーム形に遺存している窯跡は 非常に少なく、府下泉北丘陵の須恵器窯におい ても極少数が知られているにすぎない。所謂 地山くりぬき式の窯の例が多く、南大阪におい ては「TK-301- II」、「TK-2」等があるが、いず れも「地山くりぬき式」あるいは「一部くりぬ き式」のもので、そのくりぬきの部分のみ天井 部が遺存していることが多い。豊中市の村町下 池窯跡もその例であった。

ところが34—A窯においては、天井部は塗り 込まれたスサ入り粘土と被熱した砂質粘土がう すくみとめられたのみで、地山粘土の酸化層は みとめられず、さらに窯体両側の地山粘土の成 形レベルから考えて、本窯は明らかに半地下式 構造のものである。したがって本窯は極めて稀 少な遺例といえよう。

出土遺物

今回の発掘調査の成果は、既に述べたとおり本市の須恵器生産の中にあっては、従来から34号・39号・9号窯などの表面採集で少数知られているにすぎなかった最終段階にあたる実体が、窯跡と灰原の双方の調査によって明らかにされたことである。特に39号・45号などの各窯の調査において、杯・杯蓋の小型化までは解明できたが、杯・杯蓋の逆転に至る良好な資料がみとめられず、従来からの課題であった。本窯では、一次の方のでは、このタイプの須恵器が含まれていることを確認しており、本格調査による資料の収集が望まれていたが、今回の調査は、この点について一応の成果があった。

つぎに、もうすこし広い観点に立脚して本窯出土須恵器の位置づけをしてみよう。本窯出土須恵器は、概ね古墳時代後期後半に位置するが窯跡出土資料による須恵器編年試案を、いち早く発表された森浩一氏は、この大きな器形変化を第Ⅲ型式から第Ⅳ型式への変化としてとらえられた。本窯の操業期をこれにあてると、森氏の第Ⅲ型式中葉~第Ⅲ型式後半~第Ⅳ型式前半の段階に位置づけることができる。須恵器の時期区分を、陶邑古窯跡群の個々の窯跡から出土した須恵器によって行い、各時期をその窯跡の名称によって表現した田辺昭三氏の提唱によの名称によって表現した田辺昭三氏の提唱によると、本窯は第Ⅲ期に位置づけた「TK 217」にあたり、このTK 217の付高台杯をのぞく大半の形態を含んでいるといえる。

中村 浩氏は田辺昭三氏の編年を基本としながらも、個々の窯の名称によって編年区分名称とするのは好ましくないとの判断から、新たな型式分類を行い、和泉陶邑窯をI型式~V型式20段階に細分したが、この分類による比定が最も細かく、当然のこととして本窯の出土須恵器を、最も適確に表現することができる。すなわ

ち同氏の編年案によると、34—B窯に相当する 下部灰原の中~下層は、Ⅱ型式第5段階に、34 —A窯に属する下部灰原の上層及び上部灰原は、 Ⅲ型式6段階~Ⅲ型式1段階に比定することが できる。

このうちⅡ-5段階は、基本的には6世紀を 通じてみられる形態に何らかわらないが、杯の 器径が除々に小型化しつつある段階で、Ⅱ−6 段階の急速に小型化する前段階的様相を呈して いるという。本窯におけるこの段階でのより鮮 明な特徴は、高脚高杯脚部のスカシ孔の位置や 凹線文などの装飾の形状にあらわれる。6世紀 を通じて技法的な退化が進むなかで、高杯の脚 柱部に施されたスカシ孔は長方形のものが2段 3方に穿たれるのが常であったが、スカシ孔の 消滅の過渡的段階として 2段 2方向のものが製 作された。本市の山の谷支群内所在の38号須恵 器窯跡の調査では黒色灰層出土の高杯は、2段 2方向の単純形態であることが知られているが、 本窯の黒色灰層にあっては、下部灰原の下層は 3方向のもの、上層は2方向のものと明らかに 区分され、その間の形態的な推移を実証してい る。また、脚柱部と脚裾部の凹線も、下層の高 杯脚(46)と、上層の高杯脚(23)の比較でも明ら かなことは、さきに述べたとおりである。

大形甕においては(51)や(42)のように、下層 ~ 中層において検出されたものにおいては旧来 からのタイプを踏襲しているが、上層に至ると 様相は一変し(15)のような独特な波状文をもつものが出現し、あるいは単線のヘラ描波状文のような装飾を極端に簡略化したものがみとめられる。

このようにみてくると、杯・高杯・甕などの 代表的な器種が、かなり速いスピードで形態変 化 (簡略化) が進行していったといえる。杯に 止まらず、高杯・提瓶などの他器種にみられる 小型化やヘラケズリ技法の省略なども、すべて 技法の簡略化のあらわれである。

単に形態の変化、技法の簡略化に止まらず、 新たな器種の出現もこの時期の特色であり、そ の代表的なものは盤(皿)の出現である。第4 章では上部灰原出土の盤(16)を示したが、下部 灰原においても、この他数点が出土した。図示されたものは口縁を若干加飾したものであるが、底部から直線的に外側にたちあがり、丸みをもった口端でおわるものや、平らな口端面をもち 先端が内側に返るものなどがあり、バラエティに富んでいる。中村編年によると、II-6段階で盤が出現しており、本窯の盤も出現直後の段階のものと思われる。

34-Aの新段階で出現したとみられる、かえ りを有するつまみ付杯蓋は、出土数量が少なく、 本段階に至って、あまり長期を経ずして本窯は 閉窯されたらしい。新しい器形の出現は、工人 に新たな意欲をもたらしたのか、あるいは、新 たなモデルとなったものに、忠実に製品をつく ろうとさせたのか、前段階のものにみられたよ うな、天井部のヘラ切り未調整という外観的に も粗雑な製法を払拭して、天井部にていねいな ヘラケズリを施している。(つまみ付杯蓋をやや 大型にしたかえりを有する蓋形土器も出土して いるが、これには天井部の口縁まで全面にヘラ ケズリを施したものもある)。これらの現象から すくなくとも新しい器形に対する工人の意識を とらえることができるのは注目すべきことであ る。

このつまみ付杯蓋にともなう杯(身)は図化できなかったが、前段階の杯蓋の天井部をやや平らに成形したものが少数出土している。これに類するものとして、側部が内弯ぎみに上がり、口縁において外側に小さく反転するタイプも出土している。これは兵庫県明石市高丘(陶)瓦窯跡群において比較的まとまって検出されているが、本窯においては微量である。

もうひとつ指摘しておきたいのは、本窯出土 のかえりを有するつまみ付杯蓋において、内面 のかえり端部が口端より突出するものがなく、 かえりが内面に納まっていることである。

中村編年によると、Ⅲ-1段階の杯蓋は「まさに前段階の杯を逆転させたかの印象」をもつもので、かえり端部が明らかに口縁より垂下し、かつ器高も高い。この形態からいえば、本窯の

つまみ付杯蓋はもっと後出的要素をもつもので、しているⅢ—2段階にちかいともいえる。しかし、付高台杯が出現していないし、高杯や腺・提瓶などの他器種との比較による限り、本窯はⅢ—2段階に至っているとはいえない。この点については、34—A窯において短期間でもような形とする杯・杯蓋と同様に、この新たないのではないようである。このような見はあらわれていないようである。このような見はあらわれていないようである。このような型はあらわれていないようである。このような型はあらわれた変化は、前段階の小型にとから杯にあらわれた変化は、前段階の小型とする杯・杯蓋と同様に、この新たな段階のではないか。少なくとも、34—A窯内における速かな変化と解釈できる。

まとめにかえて

この時期における器形の大きな変化は、古墳時代の須恵器研究において、従来から注目されてきた問題でもあり、田辺昭三氏は、これを「第2の画期」としてとらえ「社会的変動の反映であり、一方、須恵器生産の場においても、生産体制に及ぶ変革」であると規定した。この時期を境として、畿内と地方における生産の体制に大きな変化のあったことが知られており、千里丘陵における須恵器生産が、ほとんどこの時期には終止符を打つことでも、それを証明している。

森 浩一氏は、古墳研究の立場から「群集墳の衰退、さらには追葬活動の停止も、その原因は国家権力による干渉」と考えた。窯業生産の場において国家権力の及ぶところは墓制のそれほど直線的なものではないとしても、新たな器形の要求が、新たな文化的所産の要求でもあり、その主導権を国家権力が把握していた当時の社会的な背景を考える場合、このような器形の変遷が速かに、かつ各地でかなり画一的に行なわれてゆくところは、間接的には国家の干渉ともいえる。

しかしその反面、本窯の資料でみたような、 その前段階における、杯・高杯などの細部の変 化は、生産体制の内部における順応であり、中村氏のいうⅡ — 6段階は簡略化の極限であったがもしれない。しかも次段階における新たな変化といえども、杯と杯蓋を逆転させて、つまみをつけるという(Ⅲ — 1 段階)従来からの延長に立って速かに器形の変遷を行っており、器形の斬新さからみる評価のみよりも意外と前段階からの技法の変化を受けているとの評価も重要であろう。

一方、その供給先を考えても、千里古窯跡群の西方、芦屋市八十塚古墳群においては、7世紀にはいってもなお造墓活動が続いているという指摘は重要である。調査者は兵庫県明石市の高丘古窯からの製品の搬入を想定しているようであるが、本窯の周辺地域において、操業の最新段階においても、なお続々と横穴式石室室にあるが、本窓の創出後にあっても、従来の需給関係が依然として残存するのである。そして産ニボー塚古墳は7世紀前半には追葬期が終るというが、この古墳群の終末時とほぼ時期を同じくして、本窯跡は閉窯され、千里古窯跡群も、ほとんどが生産を終収するのである。

(2) くりぬき水路

佐井寺くりぬき水路調査の、第1の問題点は その創設年時の解明である。唯一の文献資料であ る中西家文書には、創設年時が記入されていな いのみか、文書作成年次も記入されていない。 ただ、明和9年(1772)6月2日、吉志部郷・ 高槻領立会「大池操抜ニ付諸払出覚」というの が存在するところより、明和9年にはこの水路 が存在したであろうとの推定ができるのみであ る。しかし中西家文書に記入された、くりぬき 水路は見取り図ではあるが、その図中に記入さ れた注記とともにかなり正確なもので、現状と ほぼ一致するが、前述したように創設年時の記 入がしてないということは、遺構を歴史的に考 察する上で不利なことである。釈迦ヶ池につい ては、種々の伝承がありながら、この水路の構 築年時については伝承すらない。しかし創設年 次が不明であるということと、この水路のもつ機能性とは、おのずから別箇のものであり創設 年次が不明ということが、この水路の歴史的価 をいささかも減ずるものではない。

思うに太閣検地以来、農民が一段と領主層の 苛斂誄求に苦しめられた事実は、近世史を専門 に研究したもののみに止まらず、今日なお生存 する年配者は、父母や祖父母から直接その厳し さを耳にしたはずである。かかる見地からも、 この水路の創設年時を明らかにすることには、 大きな意義があろう。

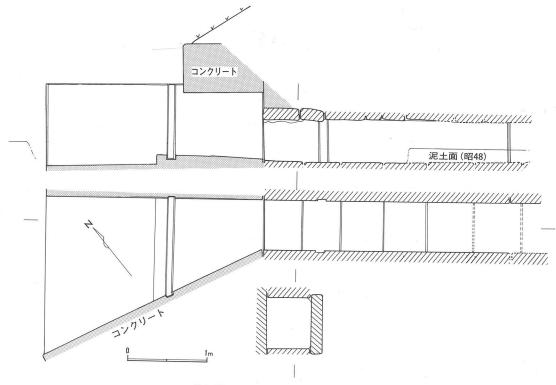
第2の問題点は、126mにおよぶ洪積層の丘陵 下をいかなる「設計と工法」によってくりぬき、 今日まですくなくとも200年以上も、機能させて きたかということは、創設当時の土木技術の水 準を知ることの手がかりとなる。

これについては、取水口の構造を除いては、 なにひとつ究明された記録はない。洪積層の地 山を素掘りし、木組をもって補強してあるとの 口碑はあるが、推定の域を一歩もでるものでは ない。

昭和49年8月、市教育委員会によって実施された調査で、取水口の現状は明確にされたが、 出口の遺構は1000㎡にわたる湿地帯の地下にあり、構造を明確することは、きわめて困難である。

第3の問題点は、その構想はかの箱根用水に も匹敵するようなくりぬき水路が、いかなる歴 史的背景をもってつくられたかということであ る。なぜ生命の危険をおかして、吉志部(岸部 かも)の農民が、この水路をつくらなければな らなかったか、ということである。

大阪府下においても、この水路とほぼ似たくりぬき水路が、貝塚市や豊中市にあり、貝塚市清児町に所在する「清児隧道」は、出・入口が割石積であるにもかかわらず、内部は「きつねぼり」(素掘りか)になっているとの調査報告がある。これは幕末か明治初期に創設せられながら、確たる記録も発見せられていないらしい。一方豊中市待兼山町に所在する「山池水路」は、安政4年(1857)に着工されたとの記録が発見



第34図 くりぬき水路入口概要図

された。延長500mにおよぶ、くりぬき水路が改修保存されて、いまも機能している。このふたつは、幕末に施工せられたものであり、当時の農民が用水の確保についていかに努力したかを示すものであり、本書第6章、その他の調査の中で述べた溜池の築造と軌を一ツにするものである。

かく考察してくると、大阪府下における前記の2例をさかのぼること100余年の構築とされるこのくりぬき水路の構築にいたらしめた歴史的背景を解明することは、吹田市史が近世の歴史の中で多くの頁をさいて水利問題をとりあげた意義とも一致し、幕藩体制下における農民哀史を明らかにする物証となり得るものである。

しかし本遺構は、湿地下3~4mにあり、これ以上執拗に遺構を追求した場合は、遺構を損傷する場合もあり、加うるに今回の土地区画整理工事は、該当部分を盛土によって施工されることになっており、これらを勘案して府教育委員会文化財保護課・市教育委員会社会教育課・都市開発部区画整理課、三者協議の結果、今回の造成工事により、遺構が損壊されることはあるまいとの判断に達し、調査を打切ることとした。しかし今後、この水路付近において各種工事を施行する場合は、本書の調査記録を参照して施工し、くりぬき水路にいささかの影響をも与えることのないよう留意されたい。

〈引用文献〉

島田義明『下村町窯跡』豊中市教育委員会 昭和49年

中村浩ほか『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯 昭和53年

鍋島敏也·藤原 学『千里古窯跡群』 昭和49年

森 浩一「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究30号』 古代学研究会 昭和37年

森 浩一「あとがきにかえて」『論集終末期古墳』 昭和48年

田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ 昭和41年

森 浩一「群集墳と古墳の終末」『岩波講座日本歴史2』(古代2) 昭和50年

森岡秀人・古川久雄「芦屋・八十塚古墳群岩ケ平支群の調査」『芦屋市文化財調査報告 第11集』 昭和54年

吹田市史編さん委員会『吹田市史第2巻』吹田市史編さん室 昭和50年

―佐井寺東土地区画整理事業にともなう―

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和55年3月31日

編集吹田市教育委員会

発 行 吹田市都市開発部区画整理課 吹田市泉町1丁目3番40号